

第3 問題作成部会の見解

1 問題作成の方針

平成26年度の問題作成に当たっては、大学入試センター試験（以下「センター試験」という）の目的と性格及びその役割を考慮し、従来の方針を継承しながら、現行の高等学校学習指導要領の理念に沿って、可能な限り新味を加えつつ、受験者の学力を検出できるように配慮した。また、論理的思考力と感受性、表現の読解力をバランス良く兼備した学力の重要性を考慮し、その達成度を判定できるものとすることを目指した。

以下は、問題作成部会として特に留意した点である。

- (1) 問題は昨年と同様に4問とし、「近代以降の文章」から評論と小説各1問、「古文」1問、「漢文」1問の配列とし、200点（各50点）の配点、80分の問題とした。
- (2) 出題の範囲は、高等学校における教育課程の実施を踏まえて、「国語総合」「国語表現Ⅰ」の教科書レベルとし、受験者の基礎的かつ基本的な学力が反映されるように配慮した。また、受験者の思考過程に沿った設問及び設問形式となるように工夫し、各設問の難易度がバランスのとれた問題となるように考慮した。
- (3) 問題の構成は、高等学校の国語教科教育の実態に即して、基礎的かつ基本的な学力が検出できるものとなるように配慮した。また、受験者の文章読解や思考過程の流れに沿う問題構成となるように工夫し、難易度においてバランスのとれた設問構成となるように考慮した。
- (4) 問題文、設問、リード文及び各選択肢の吟味には細心の注意を払うとともに、基礎的言語能力・認識力・想像力・判断力を含む総合的な国語能力を問うものとなるように工夫し、論理的な思考力と感性的な鑑賞力、及び国語表現能力も判断できるように配慮して問題作成に当たった。また人物関係図、注などを適宜補い、受験者の理解の一助となるよう工夫した。

平成26年度の受験者は、昨年より12,566人減の503,587人、平均点は2.37点下がって98.67点（得点率49.33%）と、過去最低であった。得点率が50%をわずかに超えた昨年来をさらに下回ったことに加え、最高点が満点ではなかったこと（195点）、センター試験は各科目の平均点6割を目安としていることなどから、「国語」の問題は難度が高いという印象を受験者に与える可能性も考えられるが、受験者の学力を測るという試験本来の役割は確実に果たしており、その意味で、実質的な難易度は十分に許容される範囲の内にあると判断する。

2 各問題の出題意図と解答結果

問題ごとに、問題文の選定と出題意図や工夫を述べ、併せて受験者の解答結果を踏まえた試験問題に関する考察を述べる。

第1問 ^{さいとうまれし} 齋藤希史『漢文脈と近代日本 もう一つのことばの世界』（日本放送出版協会、2007（平成19）年）から出題。掲出箇所は序章の「漢文脈とは何か——文体と思考の二つの極」中の「漢文学習の入り口は素読です。」（23ページ10行目）から「漢文で読み書きすることは、道理と天下を背負ってしまうことでもあったのです。」（29ページ4行目）までである。

問題文は、漢文学習の基本となる素読（訓読）の重要性を基点にして、江戸時代後期におけ

る漢文学習の意味を中国の士大夫（士人）と江戸時代後期の武士とを比較しながら、その共通性と相違点を述べた文章である。本来は中国古典文である漢文が、江戸時代後期の武士にどのように受け入れられたのかを簡潔・明快に整理しており、個々の設問では、歴史的な事象を広い視野から捉えなおす考察の意義や「言葉」に関する普遍的な問題、近世後期の武士が置かれた状況とそこから生まれる意識の変容などを問うた。字数は約4,400字。

問1 基本的な漢字知識とともに、傍線部前後の文脈への理解力を問う問題。日常的に用いる言葉だけではなく、文章語に用いられる漢語語彙が豊かであるとともに、文脈から語義を推測できる受験者が優位に立ったと推測され、受験者の偏差を明確に区分できた。

問2 中国を視野に入れ、漢文を学ぶことによって生まれる「ある特定の思考や感覚の型」という前半部のキーワードを確認させる設問。著者の論述上の構想とともに、江戸期における漢文学習の起源を広く検証することの必然性を理解しているかどうか鍵になる。正答を適切に選んだ受験者が多かった。

問3 「言葉」と「人」の関係を通して、中国の士大夫が中国古典文を学ぶ過程でどのような現象が発生したのかを把握させる設問。中国古典文の本来的な性格の読み取りを修辭的に表現された内容把握を踏まえて確認させる意図を持っている。本文における言葉と人と世界との関係のありようを正確に理解しているか否かが正誤を分けたと考えられる。

問4 近世後期の武士における「刀」の意味を、「武勇」と「忠義」の関係を通して把握させる設問。文と武に引き裂かれた近世後期の武士階級のアイデンティティがどのように止揚され、改めて確立されたのかを、記述に即して理解できているかが答える上でのポイントである。

問5 問題文全体の文脈を踏まえ、漢文を読み書きする行為が近世後期の武士にどのような結果をもたらしたのかを把握させる設問。中国古典文の本来的性格と近世後期の日本の武士が置かれた状況との関わり合いを捉えた上で、漢文学習が彼らにもたらした内実を問うた設問でもある。本文の全体的な内容を文脈とともに読み取る識別力が求められたが、結果として、受験者の偏差を明確に区分できた。

問6 (i)は、問題文における表現の説明としての妥当性を問う設問。やや難しかったかもしれないが、正解する受験者は多く、正誤の区別は明確であったと考えられる。

(ii)は、問題文全体の構成の仕方を問う設問。構成の把握に戸惑った受験者が多かったと見え、全体に解答がばらつく結果となった。

第2問 岡本かの子の小説『快走』（初出：『令女界』1938（昭和13）年12月、出典：『岡本かの子全集 5』ちくま文庫、1993（平成5）年）からの出題である。

『快走』では、女学校を卒業後、一日中家の中で家事に追われ「縮こまった生活」に「屈托」している道子が、家族に内緒で多摩川の土手を夜ごと疾駆し、脈打つ心臓の鼓動に生きる「喜び」を感じる。また、道子の隠しごとを心配した両親は、こっそりと月光に照らされる娘の疾駆する姿をのぞきに行くが、いつしか二人の「心配」は「好奇心」へと変わり、自らも思わぬ「喜び」を感じる。この作品には、肉体の躍動が精神の「屈托」を解きほぐし、生の充実を感じせしめることの「喜び」が描かれている。叙述を丁寧にとどめることで、人物の心情や相互の関係を把握する小説読解の基本的能力を見るときともに、娘とその両親の「月光」に照らし出さ

れる充溢した生への渴望を読み取らせることに、設問の主眼を置いた。なお出題部分は、全文を対象としたため約7,000字となるが、会話文が多く語彙も平易なため、この分量はそれほど受験者の負担にはならないと判断した。

問1 本文中の語句について、前後の文脈を踏まえた上で正確な意味把握ができているかを問う設問であった。受験者にとってはいずれも基本的な語彙であったようで、正答を適切に選んだ者が多かった。

問2 道子の「屈托」の内実を問う問題である。直前の陸郎とのやりとりをも踏まえて、与えられた役割をこなし続ける道子を感じる徒労感を本文に即して正確に把握し得たかを問うた。結果として、受験者の偏差を明確に区分できた。

問3 道子が発見した「自分独特の生き方」の内実を問う問題である。身体感覚に関わる表現にも着目させ、「屈托」から逃れた生の実感が読めているかを問うた。

問4 道子とその兄陸郎との関係の捉え方を問う問題である。作品全体から二人の関係を示唆する表現に着目させ、複雑な心境を抱えている兄妹のありようを問うた。

問5 道子の父母の感じた喜びの内実を問う問題である。両親は娘への懸念から偵察が始めるが、二人にはいつしか「娘のことも忘れる」ような充実感がもたらされるに至る。この経緯を精確に把握させ、具体的に二カ所の傍線部の笑いに関する表現を軸に読み取れているかを問うた。作品自体の読みやすさも手伝ってか、正答を適切に選んだ受験者が多かった。

問6 「心情説明の仕方」「比喩表現」「焦点の変化」「人物の台詞」「倒置法の効果」など、小説における表現上の特徴についての理解を問う設問であった。結果として、受験者の偏差を明確に区分できており、表現の特徴を問う設問としては適切な難易度であったと言える。

第3問 『源氏物語』は平安中期の作り物語である。「夕霧」の巻から出題した。『源氏物語』は何らかのかたちで必ず高校生が学習する作品であり、かつ、語彙も豊かで敬語にも富み、奥行きのある文章であるため、古文の学力を測るには好個の作品と判断した。一般的には『源氏物語』は難解であるというイメージが強いが、古文作品全体の中では、極めて念入りに書き込まれた行文であり、むしろ誤解の少ない文章である。ただし、試験全体の解答時間に鑑み、分量は昨年度と比べやや少な目である約1,300字とした。

安定した家庭生活の中、魔がさして妻以外の女性に心奪われた夫（夕霧）に憤る妻（雲居雁）、その妻に引け目を感じながら、素直に謝れず開き直る夫を中心に展開される場面であるが、古典の世界の広がり示すべく、一般に想起される『源氏物語』のイメージとは一致しない場面を選択した。

出題箇所に関しては、登場人物は夕霧と雲居雁にほぼ限られているため、それぞれの心情を丁寧にとどることに出題の主たる狙いを置いた。

問1 (ア)基本語「なめし」、助動詞「じ」の解釈を文脈に即して理解させる設問、(イ)基本語「らうたし」「聞こゆ」の解釈、(ウ)慣用句「いざ、給へ」の逐語的な解釈を問う、いずれも基礎的な水準の設問である。しかし、特に(ア)(イ)において短絡的な解答傾向が見られ、受験者の基本的語彙力^{うかが}の低下が窺われた。

問2 同形異義の識別力を問う基本的文法問題。ポイントは動詞の活用語尾を正しく識別できたか否かにあった。

問3 「心苦し」という心情を軸に、主体などの正しい文脈理解を問う設問。傍線部直前部分の正しい解釈が解答の前提となるが、不必要な誤読を排するべく、直前部に注を付した。

問4 「もの懲り」の具体的な内容を問う設問である。ポイントは「かしこ」が落葉宮を指すと読み取れるかどうかである。解答の助けとして、「かしこ」の直前に注を付し、落葉宮の存在を示したが、誤答が目立った。

問5 A、B、Cの会話について、やりとりの流れに注意しつつ、その適切な内容理解を見る設問である。正答に達するには、会話主たちが本音と建て前を使い分けているのを意識し、さらに原文と選択肢を精緻に照らし合わせる手続きが必要となるため、各設問中、最も慎重な読解を要するものであった。受験者の読解力を測るのに適切な設問であったと言える。

問6 問題文全体に関する理解を見る設問。解答時間の制約を考え、各選択肢が問題文全体を覆うという形式はとらず、選択肢毎に個別の場面的理解を見るかたちとした。基本的な読解力を測るという目的に合致する結果であった。

第4問 明代後期の文人官僚、陸樹声の『苦竹記』（『陸文定公集』巻十二）を題材とした。長江の下流域では筍を食べる習慣がある。人々は甘い筍を好み、苦い筍を嫌う。だが、甘い筍はそのために取り尽くされ、苦い筍は却って天寿を全うする。筍という身近な食材を取り上げ、平明な文の中に「無用」をめぐる漢文特有のものの見方・考え方が窺え、奥行きのある文章である。

文字数は184字（句読点を除く）。平成25年度本試験が198字（同）、追・再試験が196字（同）であったのをみると若干少ない。また設問数も前年度本試験の9から8とした。受験者の負担感を抑えつつ、じっくり設問に取り組むことを求めた。

出題に当たっては、「無用」をめぐる筆者の主張の把握を軸に、漢文の基本的語彙や句法を理解し、併せて文章の正しい読解ができるかについて問うことを基本とした。題材は比較的読みやすく、本文の文字数、設問数、注の数についてもおおむね適切であったと思われる。

第4問全体の得点分布には偏りがなく得点偏差も適正なものであり、識別力は高く、妥当な問題であったと考える。

問1 語彙の意味を問う問題。この文脈における「習」・「尚」の意味を把握できるかを問うた。(2)は、「尚古」「尚武」などの現代日本語の語彙を想起できるかが鍵となった。

問2 返り点の付け方を問う問題。「以」の前に動詞が前置された構文の訓読を問い、「好事者」が「とらない」というものは何であったのか、ということを考える設問であった。

問3 空欄補充の問題。本文のキーワードである「甘」と「苦」との二項対立から、全体の論理構成を把握できているか、接続語「而」「然」「而」の働きから論理展開を整序し、筆者が主張する「甘」(有用)と「苦」(無用)との価値をめぐる逆説が理解できているかを問うた。結果として、識別力の高い設問であった。

問4 返り点に基づき解釈を問う問題。漢文基本語の「猶」が解釈できているか、動詞となる「免」の意味が把握できているかを問うた。

問5 訓読して書き下し文に直すことができるかを問う問題。文脈上、「取」「棄」が受身の形になること、二重否定の「莫不～」という基本句法を理解して訓読できるかを問うた。

問6 論の進め方や表現に関する問題。話題の提示から、対立する二項の論点抽出へと進み、

そこから「無用」をめぐる論への展開を捉えることができたかを問うた。文章構成を見て段落に分ける形の問題は、漢文では1991年度以来の出題となる。この種の問題は長らく出題されていなかったためか、戸惑った受験者が多かったようである。正解を導き出す上でのポイントは、漢文基本語の「夫」の働きに着目することにあったと言える。

問7 本文の結びに位置する文の読み方と筆者の主張を問う問題。読み方・通釈・主張の読み取り、という三つの柱からなる。基本句法の「豈～耶」や「以A為B」を、この文章の展開に即して正確に捉えることができるかを問いつつ、併せて、苦い筈がそのために却って天寿を全うするというこの文章の主題を把握できているかを問うた。誤答として最も多かったのは「豈～耶」を反語に捉えている④だが、この選択肢は、読み進めると「以A為B」の読み方や筆者の主張の捉え方に大きな傷があることが分かる。結果的に受験者を適切に識別でき、第4問をしめくくる設問として有効な出題であったと思われる。

3 出題に対する反響・意見についての見解

第1問については、問題文の話題に戸惑った受験者もいた可能性もあるが、論旨の着実な展開と、リード文による補足説明により、文章の趣旨を捉えることは決して難しくない旨の指摘をいただいた。また、枝葉末節ではなく文章の根幹を捉える力を求めている意図が明確で、教育指導の際の方向性を示すものという評価も頂戴した。一方で、素材文の内容が受験者の生活感覚から離れているとの指摘もあった。しかし、日本における漢文学習の歴史的な流れを知ることによって、逆に高等学校で漢文を学習することの意味付けも可能になるのではないとも言えるはずである。また、問2に対して「部分的な読みを求める問いでいいのではないか」という指摘も見られたが、その場合、事によっては、問題文全体を適切に把握せずに、選択肢から答えを選んでいくという受験技術的弊害を助長しかねないことが懸念される。問5として付した傍線部は、問題文の流れに従って引いていくことを前提にすれば、実際に付した位置が最適であると考えられる。正答の③にある「士人としての思考や心の構え」に対応する内容が第9段落や第10段落に示されてもおり、この意味でも、問5はリード文も含めた問題文全体の内容に照らして内容を把握させる設問になっている。

第2問については、全文を出題とした点、受験者に対するメッセージ性やすがすがしい読後感といった内容面については、おおむね肯定的に評価されているが、やはり、解答時間に比する分量の多さ、解答の手間が掛かる設問の在り方等については、今後、注意深く検討していく必要がある。

第3問について、特に問4から問6において難易度が高く、素材文自体の難解さと相まって、解答に際して受験者がかなり時間を消費したのではないかと指摘をいただいた。問題文の分量に加え、リード文、注、人物関係図などを付すことを通じて、受験者の負担の減殺に努めたが、実際、選択肢の吟味に予想外に時間が掛かったと推測される。素材文の水準をいたずらに易しくする方向に安易に向かうのではなく、引き続き、受験者の理解に資する工夫を補うとともに、設問や選択肢の文言の精練に努めたい。

第4問に関しては、素材文は一見難しそうだが、論旨が読み取りやすいとの指摘をいただいた。設問はバランスが良かったが、訓読に関する設問にやや傾く面もあり、内容を尋ねる問いや、訳とセットにした問題もほしいという要望もあった。個別の設問についてみると、おおむね適切なレベ

ルの良問という声をいただいたが、問6・問7には様々な意見が寄せられた。問6の話題の提示、対立する二項の論点抽出、「無用」をめぐる論という本文の構成は、発語の「夫」に着目すると解きやすくなるが、この形式の出題が長らくなされていなかったためか、受験者にも戸惑いがあったようである。ただし、古典分野では、表現や構成に関する問題のバリエーションが限られていることも実情である。さらなる検討材料としたい。問7は、第4問の締めくくりに位置するため、出題数とそれに対応する配点の関係上、重い問題になる傾向にあり、またその配点にふさわしい難易度が求められると考える。本年度は、本文の長さや出題数の調整を図りつつ、読み方・通釈・主張の読み取り、という先述した三つの柱から成る3行選択肢を用意し、じっくり取り組むことを求めた。本問に対して「句形をただ覚えているだけではなく、論旨を理解した上で適切な用法を選んで解釈できるか」を問うている、「句形だけでわからなくても、荘子の無用之用がわかれば理解の補いになる」と評価していただけたことは幸いであったが、さらに調整・工夫する余地もあるだろう。

4 今後の問題作成に当たっての留意点又はまとめ

まず、それぞれの大問について述べ、最後に全体に関して意見を示す。

評論問題に関しては、今後とも、高等学校の生徒に日常的になじみやすい話題や視点ばかりでなく、その論旨が文章全体から明快に読み取れる文章を選定することが望ましい。また、各設問においては、選択肢の文言を精査・精錬して、内容上は適切にして、かつ晦渋に過ぎぬ平明な表現を盛り込んでいく必要がある。さらに、全体と部分の読み取りについても、傍線を付す箇所に工夫を凝らすなどして、過度の負担が受験者に生じないように心掛けたい。

小説問題については、本年度は戦時下の作品を取り上げ、作品の全文を掲載した。分量は多かったが、人物の心情や展開は読み取りやすく、表現上の特徴も指摘しやすい作品であった。今後も受験者にとって有益な内容の作品を題材として選び、小説読解の基本的能力を見る設問を心掛けたい。一方、指摘されている素材文の分量の多さについては、受験者の負担にならないように留意したい。

古文問題では、先述のとおり、今年度は問題文の分量に加え、リード文、注、人物関係図などを付すことを通じて、受験者の負担を減らすことに努めた。今後もこうした対策を講じるとともに、解答時間との均衡に一層の留意をしつつ、読み込むに足る内容を備えた問題文の出題を心掛けたい。

漢文問題は、受験者が充分に取り組めるよう、素材文の分量・設問数を調整した。また、今年度の問題文のテーマは思想的な色彩をもつと言えるものだったが、高等学校で「倫理」科目を学習した受験者が有利になり過ぎないように、思想内容に大きく踏み込んだ設問は避けた。さらに、空欄箇所や送り点や送り仮名がない傍線部が連続しないように努めたが、訓読を苦手とする受験者には難しく感じられたのではないかと指摘も見られた。表現や構成に関する設問と併せて、今後とも適切な出題形式を検討したい。

本試験全体については、基本的な問題構成は前年度を引き継ぎつつ作成に当たったが、平均点が2年連続で5割程度であったこと、満点が出なかったこと、標準偏差が26.83と、前年の32.95、前々年の35.32などと比べて低い値だったことなどに加え、一部問題には難度が高いとの声も多かった。しかし、試験問題全体としても、各大問としても、問題文の内容や表現はもちろん、設問の方向性や狙い、問うている内容などについては、基本的に適切で妥当であると考えられる。ただ

し、解答に際して受験者に生じる作業上の手間や時間的余裕などに対する配慮、注の多寡や必要性などについては、今後一層留意する必要がある。

今後とも、設問の適切な難易度の維持に心掛ける一方で、教育現場に新鮮なメッセージを送り続けることの重要性を認識しながら、問題作成に臨みたい。